

学生力を地域に生かす ～地域に眠るマンパワーの発掘～

特別座談会



阪神・淡路大震災を契機に、地域防災の重要性が叫ばれるようになりました。しかし、「日中、地域に若い人がいない」「近年のライフスタイルの姿容に伴う地域の「ミニミニ」不足」などの問題を抱え、有効な防災対策に頭を悩ませている地域もあるようです。

それらの問題の解消は容易ではありませんが、神戸市須磨区にある神戸女子大学では、学生が「大学も地域」ミニミニの「員」という視点から、大学の防災対策や地域行事への参画などを研究論文のテーマとして取り上げ、地域の商店街や防災福祉コミュニティ、小学校、消防署、区役所などとの交流を重ねるうちにお互いに連携を深め、ミニミニの輪が大きく広がっています。

今回は、これらの取り組みを中心的に指導しておられる梶木典子先生の研究室で「地域と大学、行政との連携」をテーマに行われた座談会の様子をお送りします。

自分たちの暮らしをまちを知る

行本 梶木先生はもともと、どのような研究をされていたんですか。

梶木 子どもの遊び環境の研究です。自分に子どもができたとき、子どもが外で安全に遊べる場所が少ないと感じたことから、約10年前に研究を始めました。当時は、高齢者についての研究ばかりが行われていて、子どもを育てる環境という点には、あまり目が向けられていませんでした。

行本 先生が研究をさらに追及された背景には、阪神・淡路大震災の影響があると新聞で拝見しましたが。

梶木 阪神・淡路大震災のときは、子どもがまだ4カ月だったこともあって、がれきの中でベビーカーを押しながら、神戸の町はどうなってしまうのだろう、こんな環境で子どもをどのように育てていけばいいのかと、非常に不安になりましたね。

行本 阪神・淡路大震災の経験から、

子どもをより安全・安心に遊ばせてあげたいという意識が芽生え、それが防災の勉強、そして現在の活動につながっていくわけですね。地域社会を見ても、震災の前と後では、お互いのつながりやかわり方が随分変わったように思いますが、大島会長いかがですか。

大島 子どもの安全という観点から見れば、私たちの地域では平成9年に須磨区内で起こった児童殺傷事件をきっかけに、地域で子どもを守ろうという組織が立ち上がりました。その組織が、安全で安心なまちづくりのために自分たちのまちは自分たちで守るといって、防災福祉コミュニティに発展的にスライドしていった形ですね。この防災福祉コミュニティは、基本的に各小学校区単位で結成されているのですが、私たちの地域は広いため、情報が行き渡りにくいという側面があるんです。そこで、地域を4ブロックに分け、地域の方々にすべてに情報がしつかり行き渡るように工夫しています。



座談会出席者

行本 今、小学校区のお話が出ましたが、やはり地域には地域ごとにいろいろな特色がありますよね。

水野 西須磨小学校区の特徴は、神戸市でも一、二の校区の広さでしょうね。南北には狭いですが、東西に細長く、幹線道路や鉄道がある

反面、路地が入り組んだり、迷路のようになっていたり、急斜面の場所が多いため、強い雨が降ると溝から水があふれたりしますから、子どもたちの下校時間にも気を付けなければならぬ地域です。学校から家まで1、2分で着く子もいれば、40分ほどかかる子もいますね。

行本 そのような特徴ある校区で、防災福祉コミュニティとタイアップして行われているのが、子どもたちのまち歩きです。神戸女子大学の学生寮が西須磨地域にあることもあって、そこに



梶木先生の研究室やわれわれ消防署も一緒にさせていただいているわけですが、西須磨のまち歩きに参加されて、どのように感じられましたか。

梶木 保護者の方も大勢参加されましたし、消防や警察の方が参加されるなど、地域が一体となって実施されているのが素晴らしいと思います。また、子どもたちの気持ち、目線に立った安全マップづくりが実践されているなと感じました。

山田 私は6年生と一緒にまちを歩きましたが、私が何も感じない場所でも、子どもたちは「ここは危ない！」と友だち同士で見に行くなど、子どもと大人の視点の違いを感じました。また、歩いている場所も、地図を見ながら自分たちでチェックしていて感心しましたね。このような活動は、子どもたちの防災・防犯の気持ちを育てるの

ための勉強をする学科だと思えますし、学校として地域にかかわるという意識付けは、非常に意味があると思いますね。ところで、西須磨地区の方々は、防災活動以外の地域行事などにも、積極的に参加されていますか？

水野 運動会も音楽会も会場が狭いと苦情が出るほど、あふれんばかりの人が来られます。これからも子どもたちと地域の人が出会う場をもっと提供していきたいのですが、実際はなかなか難しいですね。僕らが子どものころは、隣や向かいの家の家族構成まで知っているぐらいでしたが、今はお互い近所に住んでいる人の姿が見えない。その中で子どもたちの安全を守ろうと思えば、当然、わが子だけの安全ということになります。それが今の風潮でしょうか。

行本 子どもたちと地域の出会いをつくる旗振り役を、若いパワーが集まる大学など、学校に担っていただければ言うことはないですね。

福知 私は授業の一環として商店街の

活性化に取り組むため、須磨寺前商店街の「七夕祭り」を企画したことで、地域の方々の交流を経験できました。店を1軒1軒回ったとき、最初は変な顔をされることもあれば、歓迎してくださる方もいて、反応はさまざまでしたが、何度も通ううちに、商店街の皆さんが大変協力してくださり、最後はすごく喜んでくれました。

三谷 自分が学生のときは、地域との触れ合いなんて全くなかったですね。大学は勉強する場所であり、地域という考えはなかったですからね。でも、お話を聞いてみると、神戸女子大学は地域の中の大学として、地域の方々との橋渡しなど、大変まちづくりに貢献されていますね。

梶木 私ではなく、やっ



学生が企画した七夕祭り。学内には開催を願う学生手作りのてるてる坊主が...

に大変効果的だと感じました。小野 私は学生の代表として参加させていただきました。計画の立ち上げから実際のまち歩きまでが短期間だったので仕方がないのですが、時間があればもっと多くの行政の方に参加をお願いできたかなと少し残念でした。あとは、積極的に取り組んでくれた子と、そうでなかった子のギャップがあったことも反省点ですね。

学生と地域のきずなを深める

梶木 女子大生は母親予備軍なわけですから、このような経験が将来、自分が子どもを持ったとき、地域の行事に積極的に参加しようという気持ちにつながっていくと思います。今は子どもたちの学校行事や地域行事に無関心な親も多いので、大学で親子備軍への教育ができればという気持ちで、できるだけ地域の行事に参加するよう呼びかけています。

行本 僕は、家政学部は母性を磨くた

ているのは学生ですから。私は「行っておいでよ」と、学生の背中を突き飛ばすぐらいですね(笑)。最初に学生を動かすまでは大変ですが、一度面白と思うと、何も言わなくても責任感を持って本当によくやってくれます。学生のパワーを感じますし、みんなとても成長していくのが分かりますね。

安全・安心なまちづくりのために

行本 そういえばこの間、学生さんの卒論発表会を拝見しましたが、大変面白かったですね。研究内容もバラエティに富んでいて。

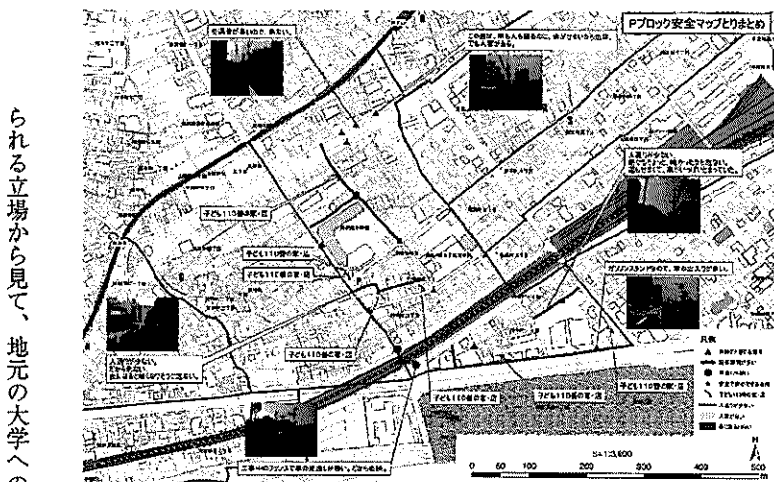
山田 私は、南海東南海地震についての研究発表を行いました。その中で、神戸

女子大学で何人の帰宅困難者が出るかの算出を行いました。東京で行われた帰宅困難者ウォークで想定された20kmを基準に算出すると、全員が学校にいたと仮定して、約3分の1が自宅に帰られず、学内に残るという結果が出ました。特に、履修人数が一番多い火曜日では、約820人が自宅に帰られなくなる可能性があるという結果が出ました。学生一人ひとりが危機感を持つというのはもちろんですが、学校側としても、現在は行っていない備蓄をどうするかなど、取り組み課題は多いと感じました。

小野 私は、西須磨小学校の安全マップづくりの立ち上げから、最後のWEB上のマップづくりまでの過程を通して、今後の大学側としての展望と、マップに対する今後の提案、地域社会に対する提案を卒論のテーマにしました。

水野 本校で安全マップを作ることになったとき、十分な時間がないまま成果を出さなければならぬという状況

の中で、どう取り組みればよいか非常に悩みました。もちろん反省点はいくつもありますが、皆さんのご協力によって、とりあえず1年でやることはやれたかなと思っっています。特に梶木先生をはじめ、神戸女子大学の学生の皆さんに応援いただけたことが大きかったですね。以前から教育学科や福祉学科の学生さんが本校の隣室用学級へボランティアで来てくださるなど、つながりはあったわけですが。



実際に作成された西須磨小学校区の安全マップ

行本 われわれ消防署が旗振り役や声掛けをすると、皆さん身構えてしまっって、どうしても防災の話になってしまっ。だから、そういう普段のお付き合いの中からつながりを作ることが大切だと思いますね。

●今後のまちづくりにおける課題

三谷 地域で防災活動にかかわって

機会があれば、気軽に地域に入っただけでコミュニケーションを図りたいですね。学校ではスポーツや文化的な学習活動を行っていますので、気軽に参加していただければ、子どもたちや地域の方との接点もできるのではないかと思います。そういう行事に対して、若い人の参加がどうしても少ないです。

水野 小学校としても、地域と学校が連携した授業や行事に、どんどん参加いただけるとありがたいですね。例えば、源平合戦（地域の運動会）、源平夏祭り、防災福祉コミュニティの競技大会など、それから、安全マップづくりなど、子どもたちの安全確保についての取り組みも行いますし、来年度はまたグレイドアップした通学路ウォークラリーや安全マップの更新を予定していますので、ぜひ協力をお願いしたいです。

行本 そういった大学側からの協力とは別に、もっと地域から大学に入ってきて欲しいなどの要望はないですか？ 小学校の子どもたちが大学を見に来るといっても、すごく勉強になるとは思います。

小野 そうですね。勉強しているところも見たいですし、もっと大学を開放できればと思います。

水野 私も双方向の交流が大切だと思います。今、学校というところは、セ

キュリティーの問題などで難しい面もありますが、それでもやっぱり「人は人との出会いによって育つ」ということは、どの世代にも共通ですから。いかに出会いの場を作っていくかということが、ひとつの課題だと思っています。

梶木 大学側から見てもいろいろな課題はありますが、それを乗り越えて、学生のモチベーションを上げるのが私の仕事だと思っていますね。1人の力では限界があると思いますけど。

三谷 神戸女子大学さんは、須磨区と連携し、地域活動を行うという協定も締結されたよね。そんなふうには、皆さんで協力してやっていけばいいと思いますよ。

梶木 皆さん、これからは何かするときは、ぜひ声をかけてくださいね。こちらからも声をかけさせていただきますので、よろしくお願ひします。

全員 こちらこそ、よろしくお願ひします。



地域と大学が連携して行われているさまざまなイベント